

# 加藤商会ビルとカブトビール

## 納屋橋

江戸時代に堀川に架けられた七橋のうち最も親しまれ、最も通行人が多いのは、名古屋のメイン・ストリートの大須に架けられた納屋橋である。

納屋橋は、慶長15年(1610)、遷府した際に架けられた橋だ。

納屋橋の中央には、バルコニーのようにして、欄干が川に張り出している。欄干の中央には堀川を掘削した福島正則に敬意を表して家紋の中貫十文字が大きく彫られている。そして、その脇に小さく「五つ木瓜」紋の信長、「五三の桐」紋の秀吉、「三つ葉葵」の家康の紋が彫られている。納屋橋では、福島正則が主役で、郷土の三英傑は脇役でしかない。

納屋橋は江戸時代に、正保4年(1647)、寛保3年(1743)など何度も架け替えが行われている。

明治19年(1886)、笹島に名古屋駅ができ、大須が名古屋駅まで延長された。その時、納屋橋は拡張されている。24年の濃尾大震災で大きな被害を受けて翌年に改築され、長さ15間半(28.2m)、幅7間半(13.7m)で橋台が石積の木橋になった。

明治43年(1910)、工期4年、工費103,453円をかけた納屋橋の大改修が始った。当時としては、最も斬新な鉄石混合の工事を請け負ったのは栗田末松だ。

覚王山日泰寺の墓地の一面に栗田末松の墓がある。墓地の入口は、納屋橋と伝馬橋の親柱だった石柱でできている。この石柱は、改修工事によって取り払われたものだ。死してなお石柱とともに眠りに残っている栗田末松の、納屋橋の大改修にかけた誇りをうかがうことができる。

この工事で高欄、側面装飾、ガス灯の台を製作したのが中島彦作だ。彼は納屋橋を日本一の美しい橋にしようと採算を度外視して工事を行なった。その結果、四年後には、工場は倒産する破目におちいった。大正2年5月5日、改築された納屋橋の渡り初めが行なわれた。竣工式を一目でも見ようと納屋橋におしかけた人は6万人をこしたという。渡り初めは、納屋橋饅頭と長命うどんの三代の夫婦が古式豊かないでたちで行った。

昭和4年12月、納屋橋川畔にある加藤商会本社ビルが、大須通りをはさみ南側にあるカブトビール支店の三階に移転した。加藤商会本社ビルを改修するためだ。カブトビールを売り出したのは半田の中屋又左衛門だ。彼は、甥の盛田善平(敷島パンの創立者)に命じて、明治20年から国産ビールの醸造の準備をさせた。試飲に成功し明治29年に会社を設立、31年からカブトビールの名称で売り出した。大正の初め、名古屋初のピヤホール勝利亭ではカブトビール大コップ10銭であった。

昭和6年、加藤商会本社ビルが完成した。このビルは国の有形登録文化財に登録されている。



大正2年竣工直前の納屋橋  
(名古屋都市センター蔵)

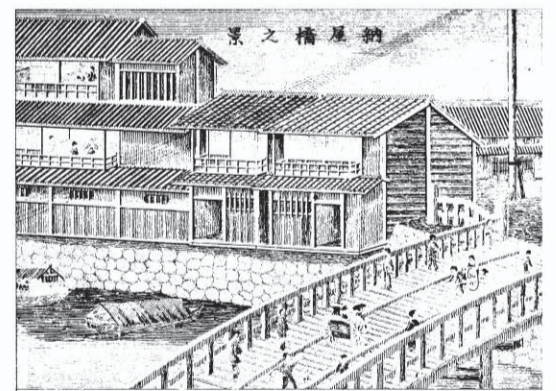
明治45年2月撮影の納屋橋  
(鶴舞中央図書館蔵)



福島正則の中貫十文字  
の家紋



信長・秀吉・家康の家紋と  
製作者の銘板



納屋橋之景(尾張名所図絵:名古屋地下鉄振興刊)



加藤商会ビル